



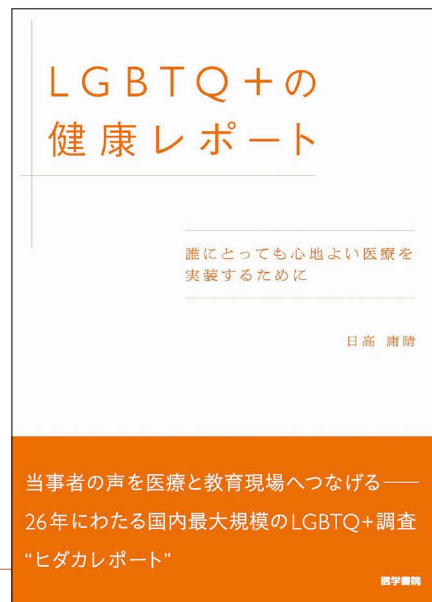
自分の常識の枠を外し、 思い込みを問い直す大切さを知る

評者 ● 大木幸子

杏林大学保健学部看護学科 地域看護学研究室

LGBTQ+の健康レポート 誰にとっても心地よい医療を実装するために

著・日高庸晴 発行・医学書院 定価・2860 円（本体 2600 円＋税）



数値の中にある物語

私たちの信じている「常識」とは、マジョリティ（多数派）の思い込みである場合が多い。そうした事象のひとつに、セクシュアリティがあるのだろう。マジョリティである異性愛者の中には、セクシュアリティの多様性について十分認識していると考え方も少なくないだろう。しかし、「生活を共にしている同居人」がいると察すると、それは妻あるいは夫であることを前提に話をしまい、DVは夫から妻への、あるいは男性から女性に対する暴力だと想像してはいないだろうか。そのような思い込みに気づかせてくれるのが本書の魅力でもある。

本書は、LGBTQ+当事者の人権、健康、社会関係、医療、教育などに関する深刻な問題と当事者の孤立を、著者の大規模な量的調査結果を示しながら、浮かび上がらせる。8章で構成され、第4章までの第1部は、当事者の現状を概説し、国内外の人権課題、カミングアウトとメンタルヘルス、性暴力とDVが取り上げられている。各章で引用される調査結果は、「思い込み」の前で声を出せず不可視化されてきた困難を可視化した当事者の声である。数値の中に人びとの物語が読み取れるのは、調査結果の記述の前後で、丁寧に社会的背景や歴史的動向、海外の状況が紹介されているからであろう。特に第1章に収載された当事者の声では、セクシュ

アリティの多様性に対する理解や配慮のない医療者のふるまいや医療機関のルールによって、病いや死に直面する人生の重大な場面で、無理解さへの対処に心と頭を使わざるを得ない状況が語られている。

調査結果を実装に結びつける

第5章以降の第2部では、医療現場と教育現場を取り上げ、それらの課題と医療者、教育機関に期待される実装のあり方が、調査結果とともに丁寧に論述されている。保健医療の現場や医療従事者の教育に携わる方々には、同様の場面が思い浮かび、自分の「常識」を問い直すきっかけになると思う。

また、巻末には、LGBTQ+当事者への3回の大規模な量的調査結果の概要が収録されている。この「巻末資料」は著者の26年にわたる膨大な仕事の一部であり、70ページにわたって集計表が並ぶ。本文と照らし合わせながらこれらの集計表を眺めると、興味深い読み物になるという体験が待っていた。ぜひ、巻末ページを繰られることをお勧めしたい。

本書の全編を通し、社会の事象を多面的に、そして当事者の視点から捉えようとする著者の思慮に、はっとする箇所が多くある。一貫して、マイノリティや差別の存在に視点を置く著者の姿勢に背中を押され、自分の中の「常識」の枠を外し、当たり前と思っている事象を捉え直すべく一歩を踏み出そうと思える1冊である。